
魔王のスカートの中

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王のスカートの中

【ZPDF】

Z2007G

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

かくれんぼをしていてテフテフは、なんと魔王の長いスカートの中へと飛び込んでしまったのです。だけど彼は知りませんでした。魔王のスカートの中はただ暗がりになつてているだけではなく、なんと別世界への通路でもあったのです。

テフテフところのは男の子の名前です。夏の間はひどく暑いので、テフテフは屋根裏部屋で寝起きをすることにしていました。あの連中が彼を訪れるようになったのは、それが原因だったのかもしれません。最初に気がついたのは、ベッドの下から聞こえてくる話し声でした。大きなものではなく、こそりとしたさやきあいに過ぎなかつたけれど、こう聞こえました。

「本当にいい匂いだね!」

「ああ、本当に」

「なぜこんなにいい匂いがするんだろうな」

不思議に思つて身体を乗り出し、もちろんテフテフはベッドの下をのぞき込みました。するとやはりそこにいて、でも驚いたことに子ぶタぐらの大きさの小鬼が三匹、顔をくつつけ合つていてのと出くわすじやあつませんか。いかにも密談中という雰囲気で、連中もテフテフに気づき、じろりとにらみ返してきます。三匹とも身体が真つ黒で、お尻にはかわいらしいしつぽがあり、思わず引っ張つてみたいような気持ちになりますが、もし本当にそんなことをしたら、とがつたツメのある指先でめちゃくちゃに引っかかるぞうです。牛かヤギのように、一本に分かれたひづめがつま先にあるのも見えます。

小鬼たちは身をひるがえらせ、それ以上一言も口をきくことなく、さつと姿を消しました。本当に一瞬で見えなくなってしまったのです。ベッドをぬけ出し、テフテフは四つんばいになつて調べてみま

したが、クギを一本打ち込んでそのあと引きぬいてできたらしさ小さな穴を壁に一つ見つけることができただけでした。魔物たちというのは、こんなに小さな穴でも自由に通り抜けれることができました。

やうやつて真夜中にテフテフを訪れたのは、この小鬼たちが最後ではありませんでした。これ以後毎晩のように、テフテフは誰かの訪問を受けるようになつたのです。それこそありとあらゆる魔物たちで、この世にはこんなに多くの怪物が存在するのかと感心しないではいられませんでした。

連中は一人だつたり、数人で連れ立つてしたりはしましたが、テフテフの屋根裏部屋を訪れ、空気の匂いをかいでいったのです。人の例外もなく深呼吸をして、につこりと帰つていきました。何の匂いをかいでいるのかさっぱりわからなかつたのですが、それが理解できたのは2週間ほどたつたころでした。その日の訪問者は子猫で、といつてもしつぽが一本あり、身体の大きさだつて子牛ぐらいありました。子供らしい遠慮のなさでベッドに飛び乗り、テフテフの手に鼻を押し付けてきたのです。ひくひくさせてひとしきり匂いをかぎ、満足そうに顔を上げてテフテフを見ました。口を開け、5センチはありそうなキバを見せて、うれしそうにニヤアと笑います。

でもあんまり遠慮がなさすぎると思ったのか、すぐに母親猫が現れて、子猫の首筋をくわえてさつと身をひるがえらせ、壁のいつも穴を通つて、あつという間に姿を消してしまいました。そうやって魔物たちの間では、テフテフの匂いのことが評判になつていったのだと思います。そしてとうとう、とんでもないやつの耳にまで入つてしまつたようでした。

「おい坊主」テフテフは真夜中にたたき起されました。毛布をは

ぎ取られ、肩をつつかれたのです。目を開くと、最初の夜に見た小鬼たちがテフテフを取り囲んでいました。

「何の用だ？」テフテフがびっくりしなかつたといえどウソになります。

両親がいる下の階に声が聞こえることも気にしない様子で、小鬼たちはげらげら笑い始めました。「あるお方が、おまえの匂いをかいでもみたいとおっしゃつてな。今からおまえを連れていくのだよ」

「どうへ？」

「そのお方のいるところへ。それ」小鬼たちは声を合わせて、テフテフのベッドのシーツをつかみました。あつと思つたときにはテフテフはその中に包まれ、何も見えなくなっていました。そのままぐるぐると巻かれ、小鬼たちの肩の上に乗せられたようでした。

「それ行くぞ」合図をして、子鬼たちは走り始めました。物音と話し声で目を覚まし、両親が階段を駆け上がつてくるのがわかりましたが、どうしようもありませんでした。両親はドアをたたき、テフテフの名を呼んでいます。

アリのように小さくなつてクギの穴を通り抜けるという経験が、テフテフには強烈すぎたのかもしれません。気を失つてしまつたらしくてその後のことは何一つ覚えておらず、気がついたときにはすでに魔王の巣の中にいました。もちろん始めから、ここが魔王の巣だとわかつていたわけではありません。最初はただの古い建物の内部としか思えませんでした。おどき話に出てくるお城のように石でできていて、見上げるとあつと驚くほど天井が高い。階段や廊下、橋やトンネルが入り組んで、内部はまるで迷路のようになつていま

す。

テフテフは目を覚まし、一人ぼっちでいることに気がついて、少し歩き回つてみることにしました。でもどこまで行つても、迷路のような通路や階段が続いているばかりです。人影はまったくなく、すぐに足も疲れてしましました。テフテフは床に座り、自分でも気がつかないうちに横になり、再び眠つてしまつたようでした。もう一度目を覚ましたときには、テフテフはさつきよりもさらに激しく驚かなくてはなりませんでした。魔王がそばにかがみ、テフテフの手を取つて匂いをかいでいたのです。

彼女は非常に背が高く、濃いブルーの美しいドレスを身につけていました。顔は見えないけれど、テフテフの手を鼻に押し当て、いかにも幸福そうに目を閉じている様子です。髪は長くきちんと編まれ、彼女の頭のまわりをぐるりと王冠のように取り巻いています。「あっ」小さな声だつたけれど、思わずテフテフの口から漏れてしましました。魔王は気づき、テフテフの手をさつと放しました。それだけではなく、立ち上がりつてテフテフに背中を向けました。

「あなたはだれ?」テフテフが次の言葉を発すことができたのは、一分以上たつてからのことでした。

「魔王だ」魔王は答えます。

「魔王?」

「黙れ!」ちらりと振り返り、見られないように顔を隠しながら、魔王はテフテフをにらみつけました。背中を向けたまま歩み去り、どこかへ行つてしましました。

彼女を追いかけていくことすら思いつくことができなくて、テフは床の上に座つたまままでいました。でも突然何かの気配を感じて振り返ると、例の小鬼の一人が壁から姿をあらわすところでした。手品師が帽子の中から取り出すウサギのように、予告もなくヒュッと飛び出してきたのです。石でできた城なのだから、針の先ほどの隙間など何千とあるのでしょうか。「あれが魔王様さ」小鬼は口を開きました。

「魔王つて？」

「魔王と言えば魔王だ。いささか不幸なお方ではあるがな」

「なぜ不幸なの？」

「そんなことより、おまえは腹が減つたるつゝ、部屋に食事を用意してやつたぞ」

「部屋つて？」

「ついてこい。案内してやる」長い廊下を通りて、テフテフはある部屋へ連れていかれました。道順は複雑で、迷子になつてしまふのではないかと不安になつたけれど、そんなことはありませんでした。数日たつうちに、テフテフはすぐに覚えてしました。

自分の部屋にはじめて足を踏み入れたとき、テフテフは少し驚きました。富殿のようといえば大きさだけれど、きれいに飾り付けられ、整えられた部屋だったのです。金持ちの家の子供部屋のようといえばいいかもしれません。すみには本棚や戸棚があり、鮮やかな色の本やゲームの類が並べられています。一人で遊ぶことができる種類のゲームばかりだということにはすぐに気がつきましたが、

ほら、おまえの食事はここに用意してあるぞ」と小鬼が話しかけてきたので、テフテフは振り返りました。

小鬼はテーブルを指さしていました。肉料理やパン、サラダといったものが乗せられ、温かい紅茶が湯気を立てています。『ザートにフルーツまであることに気がついて、につこりしないではいられませんでした。』「本当に食べていの?」

「ああ」小鬼は笑い、テフテフのためにイスを引いてくれました。
「オレの名はスケッチというんだ」

「変な名前」腰かけながらテフテフは言いました。

「早く食べないと冷めてしまうぞ。食器はあとで取りにこなせよ」「満足そうにテフテフを見やり、スケッチは部屋を出でていこうとした。なんだか少し気になる表情のよつた気がしないでもあります。なんでしたが、目の前の食べ物があまりにもおいしそうなので、今は考えないことにしました。不思議なことに、食べ終わるとテフテフはすぐに眠気を感じ始めました。せめて誰かが食器を取りにくるまではと思っていたのですが、とうとう我慢できずにベッドに入つてしましました。寝室は隣の部屋にあり、やわらかで大きなベッドがテフテフを待っていました。

翌朝日が覚めても、テフテフはやはり魔王の巣の中にいました。あれは夢だったのだろうかと思いながら日を覚ましたのですが、自分がいるのは愛想のない屋根裏部屋などではなく、飾り付けられた広い部屋のベッドの上だとすぐに気がついたのです。何だかくすぐつたいような幸せな気分で、毛布にくるまつたまましばらく部屋の中を見回していたのですが、ノックの音が聞こえドアが開いたので、テフテフはそちらに顔を向けました。

女の小鬼がテフテフのために朝食を運んできたところでした。長いスカートで足を隠してはいるけれど、顔つきや身体つきは男の小鬼たちと変わりません。「ほれ、朝ごはんだよ」と女は言い、ベッドの上に乗せてくれました。

「うん」テフテフはゆっくりと身体を起ししました。

「」の日は一日中、魔王の巣の中でテフテフは楽しく過ごすことができました。退屈することなく、あちこちの壁の隙間から魔物がいくつも現れでは、遊び相手をしてくれたのです。中でも一番気に入つたのは若いメスのゴーレンで、テフテフを背中に乗せて運び、巣の中を連れ歩いてくれました。

驚いたのは、「」には窓が一つもない」とでした。廊下も部屋もあるのは壁ばかりで、外の景色を見ることがまったくできないのです。明かりは、ところどころの壁で燃えているロウソクから得てしました。でもそれ以上に不思議だったのは、この迷路のような廊下や階段がどこまで行つても終わりにならず、角を一つ曲がると必ず次の角が、階段を一つ登るとまた必ず次の階段が顔を出すことでした。「この巣は、一体どのくらいの大きさがあるの?」背中の上で運ばれながら、テフテフはゴーレンに質問してみました。

「どうして? そんなに巨大なものが地球上のどこに建設できたのか? もしかして、この城は地底にあるの?」

「こいえ」ゴーリーンは首を横に振りました。「この巣は地球にあるのではありません。『昨日』と『今日』の隙間に、まるで糸でつるされた振り子のようじぶら下がつてゐるのです。真夜中の12時になると、昨日から今日へはあつとこゝ間、一瞬のうちに切り替わつてしまひでしょ？　口付と口付の境目は一瞬、ほんの一秒钟もない。だから針の先のように細い穴を通り抜ける力のある者でないと、この巣へはやつてくることができないのです」

「くえ」

夕方になつて、テフテフは自分の部屋へ戻つてきました。昨日と同じような夕食が用意してあり、食べ終わるとまたすぐに眠くなり、ベッドにもぐりこんでしました。

せうやつて数日があつといつ間にすきてしまつたのですが、さすがにテフテフも奇妙に思い始めました。魔王はあれ以来一度も姿を見せていませんでした。それはかまわないのだけど、なぜ自分がいつも夕食を食べ終えるととたんに眠り込んでしまうのか、不思議で仕方がなくなつてしまつたのです。だからテフテフは、ちょっとした実験をやってみることにしました。その日の夕食を田の前にして、テフテフは考えました。肉料理や野菜、パンやデザートが並んでいます。田の中に睡眠薬を混ぜるのなら、僕だったらどれを選ぶだろう。

たぶんデザートだろ？といつ氣がしました。これまでの経験からいつて、かなり強力な薬のようでした。もしデザート以外のものに入れたのなら、テフテフは食事の途中で眠り込んでしまつたことでしょう。だからテフテフはこの田、デザートだけは食べないでおくことにしました。食器を取りにきた者にばれないように、テーブルの下の見えない場所に隠しておきました。そうやっておいて寝室へ

戻り、ベッドに入つて待つたのです。

ずっと起きているつもりで目を開いていたのですが、やはりいつの間にか眠つてしまつたようでした。何かの気配で目を覚ましたのだけど、衣ずれか息づかいが、ベッドが立てるかすかなきしみのせいでつたのかかもしれません。そつと開いたテフテフの目に、その姿が入つたのです。魔王でした。背中を見せてベッドに腰かけ、テフテフの手を取つて鼻に押し当て、匂いをかいります。後ろから眺めていても、さも心地よさそうな様子です。

そんなによい匂いがするのだろうかと自分でも不思議な気持ちがしましたが、何も言わず、しばらくの間テフテフは見つめています。すると突然、こちらを向いたわけでもないのに、テフテフが目を開いていることに魔王は気がついたのです。前のときと同じようにテフテフの手を捨て、彼女はさつと立ち上がって背中を向けました。足音を響かせ、部屋を出でていつてしましました。ドアがバタンと大きな音を立てて閉まりました。朝になって、テフテフはスケッチに質問してみました。「魔王は、自分の顔を見られることをどうしてあんなに嫌うの?」

ポケットから取り出したリンゴをテフテフに向かつて差し出したところでしたが、スケッチはすぐに答えてくれました。「魔王様は、自分がとても醜い顔をしていると思っておられるからだよ。だから常にお顔を隠しておられる」

「どうして?」

「どうやら、もう、もうこのことなのだよ」

「本当にそんな顔をしているの?」

スケッチは首を横に振りました。「それが魔王様ご自身はもちろん、わしたちの誰一人として見たことがある者はいないのだよ。魔王様も、お部屋に鏡すら置かれないほどだ」

この日の夕食にもデザートはもちろんついていましたが、二つに折られた白い紙がそれっていました。広げてみると誰かの手書きの文字で、「今日のデザートには何も入ってはおらぬ。安心して食せ」と書かれていました。

料理を運んできたのは、なんとなく心配そうな表情をしたスケッチだったので、テフテフはその紙を見せました。「魔王様の文字だ」スケッチは小さくうめきました。「何を考えておいでなのか

「あんたにもわからないの?」

「見当もつかん」

スケッチは部屋を出ていき、テフテフは一人になつて食べ始めました。もちろんデザートにも手をつけました。ちょっとどきどきしながら待つていたのですが、食べ終わつても眠くなる気配はありませんでした。といつても、まったく疲れていなかつたわけではありません。昼間はさんざん魔物たちと遊んでいたのだから。今日は魔物の子供らを広い部屋に集めて、運動会のようなことをやりました。巣の中いっぱいに足音や歓声が響き渡つていたに違ありません。

夕食を終えて一時間以上すぎて、まぶたが自然に重くなつてから、テフテフは寝室へ向かい、着替えてベッドにもぐりこみました。そろやつてぐつすり眠つていたのですが、真夜中にかすかな足音で目を覚ました。誰かが廊下を歩いている様子です。足音はゆつく

りと近づき、この部屋の前で止まりました。ドアが開く音が聞こえ、テフテフは目を開き、身体を起こして待っていました。入ってきたのはもちろん魔王でした。

でも魔王は、黒い布袋をすっぽりとかぶつて顔を隠していました。まるで「ミミ袋」が突っ立つて『いる』ような眺めだとテフテフは思ったのですが、笑わないことにしました。目のところには小さなのぞき穴が開けてあるので、淡い色の瞳だけが姿を見せていました。瞳はあんなにきれいな色をしているのに、という気がしました。

「私としたことが、昨夜はまんまとしてやられた」魔王は口を開き、ベッドのすみに腰かけました。「少し邪魔をしても怒らぬであらう？」

「うん」

「おまえにちょっとした贈り物を持ってきたのだが」手のひらを広げ、魔王はテフテフの前に差し出しました。

「なんなの？」テフテフが首を伸ばすと、魔王は手の上に乗せてくれました。長さ2センチほどのかわいらしい昆虫の彫刻でした。金属で作られ、コガネムシの姿をしています。羽根の模様や針金のようないいヒゲ、6本ある足の形まで細かく作られています。金属の色をしていなければ、今にも動き出しそうです。

「これは何なの？」テフテフは魔王を見上げました。

「アーラニアがまだ盛んに作られていた時代に、ヒジアトの王が私に与せたものだ。本物の黄金でできているのさよ。おまえにやら

「どうして？」

魔王は少し口ごもりました。「見返りを期待していないわけではない。条件があるのだ。これからは毎晩、真夜中に私はこの部屋を訪れる。おまえが眠っているこの部屋だ。そのときおまえは文句を言わず、おとなしく私に匂いをかがせるのだ」

「僕の匂い？」

「もちろん」魔王はうなずきます。

「それくらいならいいけど……」

「では決まりだ」突然抱き上げられたので、テフテフは少し驚きました。魔王はテフテフをひざの上に座らせたのです。そのままテフテフの頭を自分の肩にもたせかけました。髪に鼻をうずめ、匂いをかいでいるようです。もうつたばかりの黄金の「ガネムシ」を眺めながら、テフテフはされるままになっていました。

言葉どおり、魔王は毎晩テフテフを訪れるようになりました。ひざに乗せて匂いをかぎながら、ベッドに腰かけて1時間ほど過ごすようになつたのです。気がすむとテフテフをベッドに戻し、そつと部屋を出でてきます。

夕食はいつも同じように自分の部屋で取りましたが、ときどき手紙が添えられていることがありました。いつも魔王の手書きの文字で、「今日はこんな珍しいものが手に入った」というような内容でした。だからテフテフは、誰も見たことも聞いたこともない食べ物をいくつも味わったことがあるのです。

テフテフの部屋を訪れるとき、魔王はときどき贈り物をたずさえていました。部屋の戸棚の中は、そうやつもらつたもののコレクションが少しづつ増えていきました。宝石やアクセサリーのようなものが多くたけれど、生きているサメの子供が一匹、金魚バチの中に入れてあるし、化石化していない、つまり生身の骨のままのテイラノザウルスのキバも一本あって、まだ子供の恐竜だったのか、大きさはテフテフの親指と同じぐらいしかありません。

ときどきは、魔王が数晩にわたって姿を見せないこともあります。スケッチたちも何も教えてくれないので少し心配したのだけど、しばらくするとまた姿を見せるようになります。

魔王がテフテフの部屋にいる時間は次第に長くなつていき、今ではもう一時間ばかりすごすのが当たり前になつていきました。テフテフをひざに乗せ、いろいろな話を聞かせてくれました。中でもおもしろかったのはある愚か者の話で、月夜の埠にうつった自分の影を怪物と勘違いして剣で切りかかつたり、川の中に落としてしまった金貨を拾い上げるためにダムを作り、水をせき止めたのはいいのですが、そのせいで町中が水びたしになつてしましました。

「ねえ」ある夜、テフテフは魔王に話しかけました。「あんたは本当に自分の顔を見たことがないの?」

黒い袋の下で、彼女はかすかに微笑んだよつでした。「本当にないのだよ」

「なぜ?」

「私の顔は、おまえはもちろん、私自身ですら直視できぬほど醜い

ものだからだ。誰一人見た者はいない」

「ふうん」誰も見たことがないのなら、どうして醜いとわかるのだろうという気がしたのだけど、口には出せないでおくことにしました。テフテフと魔王は、そうやつて親しくなつていきました。昼間、城の廊下で偶然出会うこともあります。何かの用事で通りかかったのだろうけど、彼女が姿を見せるとき魔物たちは騒ぐのをやめ、みなさつと壁の中へ消えてしまいます。そうやつて静かになつた廊下に足音が響き、魔王がやつてくるのです。

一度テフテフはユニークーンの背中の上にいたことがあるのだけど、突然前足で立ち上がり、テフテフを振り落とし、ユニークーンも壁の中に飛び込んでしまいました。後には、しりもちをついてきょとんとしているテフテフ一人が残されました。その様子を見て、魔王はおかしそうに笑つたものでした。彼女の笑い声を聞くと、釣られてテフテフまでユニークーンしてしまいました。

「さあ、おいで」手を引いて立ち上がらせ、魔王はテフテフを部屋へ連れかえつてくれました。

あのときなぜあんなことをしたのか、テフテフは自分でもよくわからませんでした。魔物の子供らと一緒に、テフテフはかくれんぼをしていました。魔王の巣の内部はごたごたと入り組んでいて、こういう遊びをするには本当に好都合でした。オニが決められ、他の全員はいっせいに隠れ始めます。テフテフも隠れなくてはならなかつたのだけど、いい場所はなかなか見つからなくて、たまたま目についたあそこに何も考えずに飛び込んだというわけでした。

廊下を走り、テフテフは角を一つ曲がったところでした。そこに魔王が立っているのが見えました。いつものように長いドレスを身につけた背の高い姿です。テフテフは彼女のスカートのすそを持ち上げ、その中に飛び込んだのです。そんなことをしても彼女は怒つたりしないということはわかつていました。テフテフと魔王はそれほど親しくなつていたのです。

魔王は本当に怒りませんでした。自分をスカートの中に入れ、そのまま立っているのでテフテフは身体を丸め、四つんばいになつてじつとしていました。スカートの中は真っ暗です。やがて誰かの足音が近づいてきました。オーになつている魔物の子でしょう。角を曲がつて立ち止まり、こちらを見ている様子です。「どうした？」魔王が話しかけました。

「テフテフを見かけませんでしたか？」魔物の子は言いました。「かくれんぼをしてるんです。」ひちへきたと思つたのに

「それは知らないな」魔王は平気な声で答えました。でもテフテフが彼らの会話を聞いていることができたのは、ここまででした。スカートの中は真っ暗なので、目を開けていても仕方がないほどです。目の前にあるはずの床だつて見ることができず、本当にそこにあるのだろうかと、思わず手を伸ばして確かめてみないではいられませんでした。

テフテフが期待していたのは、もちろん乾いた石の表面がそこにありました。石畳になつた床です。だけどテフテフは、思わずあつと声を上げてしまいました。手を伸ばしても、そこには何もなかつたからです。まるで穴でも開いているかのようで、幽靈に向かつてグイと手を突き出して、そこに何もないとわかつてぞつとするときのような感じです。ひざに当たつていた床の感触も同時に消滅

して、気がついたときにはテフテフの身体は落下を始めていました。

魔王のスカートの中は、ただ光が当たらなくて暗いだけではなく、井戸の穴のように何も無い場所だなどとはテフテフはまったく知らなかつたのです。悲鳴を上げながら、テフテフは落ちていきました。そうやって、どこまで落ちていったと思います？

テフテフが生まれて育つたのは、ある小さな王国の首都でした。寝起きしていた屋根裏部屋の窓からだつて、王宮の姿を見ることができました。石でできていって、屋根のとがつた古くさい建物ですが、あそこには女王がいて、この国全体を支配していました。

女王の名はジュディといいました。まだ若いけれど結婚はしておらず、きれいな銀色の髪はきつくなじらしながら頭のまわりをおおつっています。テフテフは噂でしか知らなかつたけれど、あまり親切な人ではないそうでした。王宮の中にいると、ときどきこの女王の怒鳴り声や金切り声が聞こえてくるそうでした。時計や宝石を作る産業が盛んで、技術も高いので、小さいけれどこの国はとても豊かです。暮らしやすくもあるのだけど、女王ジュディはこの国が持つ唯一の欠点だといわれている人でした。

魔王のスカートの中を落ちてゆき、テフテフが行きついたのがこのジュディの王宮だつたのです。しかも落ちていった場所が女王の住まいの内部で、四角い壁で囲まれたあのプライベートな部屋だつたのです。さらにまずかつたのは、下着を下ろして、女王がおしりをむき出しにしている瞬間だつたことでした。女王は「ギャッ」と悲鳴を上げましたが、テフテフが突然頭の上に落ちてきたのだから無理もありません。ルビーの髪飾りが外れてポチャーンと水の中に落ちてしまつたけれど、あとで誰が拾い上げたのかは知りません。

「おまえは誰じゃ?」床の上に転がっているテフテフを、女王はにらみつけました。「顔を見せい」

テフテフは顔など隠してはいなかつたのですが、見えないのは眼鏡がないせいだと気がついて、あわてて床から拾い上げて、テフテフは手渡しました。女王は引つたくなり、自分の顔にかけました。それまでには何とか、テフテフは身体を起こすことができました。だけど五分後には、がつしりした身体つきの衛兵たちに両手をつかまれ、テフテフは廊下をむりやり引っ張つていかれるところでした。背後からはまだ女王のわめき声が聞こえています。女王はかんかんで金切り声を上げて兵を呼び、テフテフを引き渡したのです。言い分なんか聞いてもくれませんでした。テフテフが向かう先が地下の牢屋だつたことは言つまでもありません。

王宮の地下は魔王の巣と同じように階段が多く、入り組んでいたけれど、もつと薄暗く空気も湿っていました。テフテフは牢屋の一つに入れられ、ドアが閉められました。鍵がかけられる音がガチャガチャと聞こえきます。衛兵たちの足音は、すぐに遠く聞こえなくなってしまいました。声を上げて泣きたくなつたけれど、誰にも聞こえないだろうからやめておきました。小さなロウソクが一本灯つていて、テフテフは牢屋の中を見回すことができました。

さつきの衛兵たちが、女王の言つことが信じられないといつ顔つきでいたことを思い出しました。それも無理はないと思います。厳重に警備されている王宮の奥深く、トイレの天井から子供が落ちてきただなんて、誰だつて信じないでしょう。でも家来たちは女王をひどく恐れていて、口ごたえどころか、質問する勇気すらないようでした。だから家来たちはテフテフのことを、わけのわからない容疑を女王からかけられてしまつた氣の毒な子供だと思つてくれたようでした。

五分もたたないうちに再び牢屋のドアが開き、若い女官が現れました。兵の誰かからテフテフのことを聞かされ、おなかをすかせているのではないかと心配してくれたのかもしれません。盆に載せて食べ物を運んできてくれたのでした。女官は気の毒そうな目でテフテフを見ていましたが、会話することは禁止されていたのかもしれません。食べ物を置いて、そのまま出ていってしまいました。

「盆」と置かれた食べ物を見た瞬間、テフテフは飛び上がるほどうれしくなりました。でもおなかが減っていたからでも、とてもおいしそうだったからでもありません。パンと茶とシチューというメニューだったのですが、スプーンと一緒に小さなフォークがそえられていることに気がついたからです。テフテフはフォークを手にし、しっかりと握りなおし、とがった先端を牢屋の壁に突き立てたのです。牢屋の壁はしっかりとした木材で作られていました。高級なものではないけれど、田のつまつた頑丈なものです。節穴など一つもありませんでした。

テフテフはそこへフォークを突き立てたのです。手がすべつて1、2回失敗したけれど、とうとう穴を開けることができました。もちろん深さ2ミリもないようなものです。直径も針の先ほどです。うまくいったのにんまりと笑い、次にテフテフはロウソクを手にし、牢屋のすみへと移動させました。ロウソクの黄色い光がその穴をできるだけ斜めに照らすようにしたのです。するとどうでしよう。光の加減で穴はもっと黒くはつきりとし、クギが何かを強く突き刺しそのあと引き抜いて作った深い穴のように見え始めたではありませんか。その穴からゴーローンが飛び出してくるのには5秒もかかりませんでした。

「じんなところにいたのですか。ずっと探していたのですよ」ゴー

「一ノ門は言いました。

「ねえ、お願ひだから僕を助けてよ」

ゴニーローンはテフテフを見つめました。テフテフがなぜこんな場所にいるのか、事情は察している様子です。振り返ってテフテフが作った穴を見、口を開きました。「もちろんお助けしたいのですが、この穴では浅すぎて、あなたを乗せて通り抜けるのは不可能でしょう」

「じゃあ、どうするの?」

「魔王様をお呼びするしかないでしょう。魔王様なら何とかできるでしょう」

「すぐに呼んできよ」

ゴニーローンは身構え、再び穴の中へ飛び込む用意をしました。「でもどこにいらっしゃるか、探すのに手間取るかもしません」

「お願いだから早くしてよ」とテフテフは言いましたが、そのときにはもうゴニーローンの姿は穴の中に消えていました。牢屋の中に一人で取り残されてしまい、テフテフは胸をどきどきさせながら待っていたのですが、魔王どこのかゴニーローンもなかなか戻つてはきませんでした。せまい中をイライラしながら歩き回っていたのですが、突然ガチャガチャという音がドアの外から聞こえてきたので、テフテフは思わず飛び上りました。もちろんドアの鍵を開ける音です。ドアが開くと衛兵が一人立つていて、出でくるようにとテフテフに合図をしました。

数分後には、テフテフは女王の広間に引っ張り出されました。この部屋のことは話には聞いていたけれど、実際に田にするのはテフテフも初めてでした。大きな教会の内部のように広く、石でできた壁には古代の英雄や伝説の登場人物たちの姿が彫りこまれています。玉座は部屋の中央にあり、巨人でも座ることができるほど大きく作られ、女王はその上にちょこんと腰かけています。おまけに常識はずれに高いステージがあり、玉座は長い階段でそれを登つていつた先にあります。テフテフは口をぽかんとあけて見上げることになりました。

「さておまえ」テフテフが田の前に引き出されると、女王は憎々しげに口を開きました。「何か言つことはないのか？ おまえは神聖な女王のトイレに侵入したのじゃぞ」

テフテフは事情を説明しようとした。自分の身体の匂いのこと。屋根裏部屋のこと。魔王の巣へ連れていかれたこと。魔王のスカートの中のこと。でももちろん、女王は信じてなんかくれませんでした。バカにした顔で言いました。「魔王だと？ 近ごろの子供は奇妙なことを思い込むものじゃな。私が子供だったころには、もつと現実的なことを考えておつたぞ」

「子供だったころにも、あんたは今と同じような嫌われ者だったのかね？」と突然誰かが言いました。かなり失礼な発言だったけれど、問題なのは発言内容ではなく、それがどう聞いてもテフテフの声だつたことです。でも断じてテフテフが言つたのではありません。命がおしければそんなことを言つはずがないし、テフテフは口を動かしてすらいなかつたのです。だけど女王を含め、広間にいた人々はみなテフテフが言つたのだと思ったようでした。人々はざわめき始め、女王は顔色を変えていました。

「子供、青葉に氣をつけたほうがよござ。女王の前であるが」

「違つよ」テフテフは言いました。「今のは僕が言つたんじやありません。誰かが僕の声音を使つたんです」

女王は広間の中をキョロキョロと見回しました。田を畠わせたくなくて、家来たちは下を向きます。「そんな者などいともおりんが」女王はテフテフににらみつけました。

「でも本当なんです。僕は魔王の巣へ連れていかれて、そこで魔王と一緒に……」

「まだ言つか。魔王などこの世にいるものか。いるならここへ呼んで」。もし本当にいるのなら、この国の半分をくれてやるが

「それはよ」と聞いた。突然また声が聞こえました。でも今度はテフテフの声音ではありません。肩にそっと手が置かれるのをテフテフは感じ、顔を上げると魔王がそこにいました。黒い「ノリ」袋をかぶつたようなあの姿です。

「おまえは誰じゃ？」二つの間に二こく來た？」女王は大きな声を出しました。

布袋の下で、魔王は軽く笑つたようでした。「おまえが会いたがつていた者だよ。この国の半分をもひこにきてやつたのだ」

「なんだと？」

「おまえはたつた今そつたではないか。もし魔王が本当にいるのなら、この国の半分をやると

「はかつたな」憎々しげに女王は顔をゆがめました。

「それはどうかな？ しかし女王たるもの、一度口にした言葉を軽々しく取り消すことはできない？」

「ふん」女王は鼻で笑いました。『汚らわしい悪魔相手に約束など守れるか』

「ほう」魔王は腹を立てた様子ではありませんでした。テフテフの肩から手を離し、一步前に出ました。魔王は玉座に向かって歩き始めたのですが、誰も止めようとしませんでした。止めようと思つても、できなかつたのでしよう。女王は玉座の上に張り付けられたかのように身動きもできず、家来たちもまるで森の木々のようにその場に立ちつくしているだけなのです。みんな青い顔をして、魔王が足を動かすのを見つめていたばかりでした。

玉座へ続く階段を魔王はゆっくりと登つてゆきます。すぐに女王と同じ高さになりました。そのまま玉座に近寄りますが、逃げ出すどころか、女王はやはり立ち上がることすらできません。頭にかぶつっている袋に魔王が手を伸ばしたことにテフテフは気がつきました。それを持ち上げるつもりなのかもしれません。女王の目の前に立ち、魔王は身体をのしかからせるようにしてくるので、そうなれば女王はその顔をまともに見ることになるでしょう。だけど背中を向けているので、テフテフや広間にいる人々からは死角になります。

「もう一度たずねる」魔王が言いました。「いつやつて来てやつたのだ。約束通りこの国の半分を私によこすか？」

「そんなことはできぬ」女王は目をむきました。でも魔王の身体を

押しのける勇気ではないよつです。

「やうか」魔王は落ち着いた声で続けます。袋のはしをそつと持ち上げ、ほんのわずかチラリとだつたよつですが、女王に顔を見せた様子です。背後から見ても、魔王がにやりと笑つているらしきのが感じられます。

「ひいっ」悲鳴を上げかけましたが、口の中に手を突つ込み、女王は何とか押し殺しました。女王の目玉は大きく飛び出し、血走り始めています。ゆっくりと手を動かし、魔王は袋を降ろして再び顔を隠しました。

「約束を守る気になつたか?」魔王の声が広間に響きます。

公園にあるシーソーのように女王が激しくうなづくのが見えました。満足そうに首を振り、魔王がステージの上から降りてきました。階段を歩きながら、再び口を開きます。「では私は、この国の半分をありがたくちょうだいすることにする。だが国の中半分や東半分をもらうといふのではない。北半分や南半分でもない。私はこの国の過去をもらひ受けよ!」

「過去だと?」ひじかけを強く握りしめ、女王は相手をこりみつけました。

「そつとも。過去と未来にむかつて、時間は等しく同じ長さだけ伸びている。その後ろ半分、過去を私はもらひのだ。よいな? 今この瞬間から、この国の過去はすべて私のものだぞ!」

「ふん」女王は鼻を鳴らしました。「過去など不要なものだ。過ぎ去つたただの『今』ためにすぎぬ。人間には未来と現在だけあれば

よいわ「

女王を振り返り、魔王は眉を上げたようでした。「では決まりだ。この国の過去はすべて私のものとなつた」隣に並ばれ、肩にそつと触れられ、テフテフは10秒後には魔王の巣へ連れ戻されていました。

魔王の巣の中で、それまでと同じ穏やかな生活が再び始まりました。テフテフは何も不満に思うことはなかつたのですが、一つだけ気になつてることがありました。人間の世界のことです。女王ジユディはなんとも思つていらないようだつたけれど、過去を魔王に譲り渡すというのはどういうことなのだろう。テフテフは不安と興味を感じないではいられませんでした。でも魔王に質問してみる勇気はありませんでした。魔王は相変わらず親切で、毎晩部屋へやつてきただけれど、テフテフは口を閉じていました。

ユニコーンは、テフテフの言つことなら何でもきいてくれました。だからときどき背中に乗つて、人間の世界へ連れ出してもらつていだのです。折りたたみ式の釣りざおのように額の角を引っ込めて、ユニコーンは普通の馬とそつくりな姿に化けることができました。その姿でなら、町の中を歩いても誰にも怪しまれることはありました。だからこのあと人間の世界で起こつた様々な出来事を、テフテフは自分の目で見ることになりました。

最初に目にはしたのは、写真屋の前の人々が作つていて長い行列でした。写真の入つた額やアルバムを手に持ち、みんなかなり興奮した様子です。顔を赤くしている人もいます。意味がわからなくて、テフテフとユニコーンは顔を見合わせました。ユニコーンの背中から降り、身体が小さいことを利用して、テフテフは店の中にさつと入り込むことができました。受付のカウンターがあり、店の主人や

助手が困った表情で客たちの応対をしています。部屋の奥には照明装置やカメラが見えるので、みんなこの店で写真を撮った客たちなのでしょう。怒った客の怒鳴り声が耳に入りました。「これはただ一枚残った母の写真だったんだ。どうしてくれるんだ?」

その人が振り回しているアルバムに張つてある写真をテフテフはのぞき見ることができました。ドレスを着た上品な夫人がイスに座つているポートレートです。光がきちんと当たり、ピントもはつきりしたよい写真なのですが、一つだけおかしなことに気がつきました。婦人の顔がないのです。顔が本来あるべき場所は真っ黒に抜け落ち、まるで誰かがいたずらをして、写真の上に濃い黒インクでも塗りつけたかのようで、顔つきも何もまったくわからなくなっています。

でも写真を眺めていて、テフテフは気がつきました。これはインクでもなんでもありません。写真の上に後から何かを塗りつけたのではなく、その部分にははじめから何も写つていなかつたに違ありません。そつと手を伸ばして写真の表面に触れ、それを確かめることができました。表面はつるつるして、何かを張つたり塗りつけたりした様子はありません。見回すと、他の人々が手にしているアルバムや額の写真もすべて同じ状態であることがわかりました。きっと何百枚という数でしょうが、どの写真も人々の顔が黒くすっぽりと抜け落ちてしまつていています。その部分はあまりにも黒々としているので、まるで真つ暗な井戸の底をのぞき込んでいるときのよつな気がしてくるほどです。

何だか背筋がぞつとするような感じがして、テフテフは写真屋を抜け出しました。魔王がやつたことはもう明らかでした。町の通りを行くと、もつとたくさんの人々が騒いでいるのと出くわすことになりました。人々が人々に叫んでいる内容はにわかには信じられな

いよいよなものでしたが、確かめてみないではいられませんでした。

テフテフは魔王から「づづかいももらつていきました。ポケットからサイフを引っ張り出し、テフテフはお金を取り出してみたのです。するとやはりそうでした。この国の紙幣には先代の女王（女王ジユディの母親にあたります）の肖像が印刷されているのですが、その顔もさつきの写真と同じように真っ黒にぬけ落ちているのです。このことを知つて女王ジユディが上げるであろう怒鳴り声が、テフテフは耳に聞こえるような気がしました。

「このあと起つたことは、もう話すのも恐ろしいほどです。人間の世界は日に日に荒廃してゆきました。始めはほんのささいで、よく注意しないと気がつかないほどものでした。美しかった公園や町の通りに少しづつホコリが積もり、「ゴミ」が散らばっているのが目立つようになつてゆきました。個人の家庭も同じようで、花壇の手入れをする人はいなくなり、魚のいる池には落ち葉が浮き、十分な世話をしてもうえなくなつた犬や猫たちも元気をなくしてゆきました。

そんな町の中を歩きながら、テフテフは一人の人に話しかけてみました。白髪のおじいさんで、庭の花壇のべりに力なく腰かけていたのです。少し離れた場所で待ってくれるようにユニークーンには言つて、テフテフは近寄りました。「ここにちは。なぜ花壇の世話をしないの?」

「なぜつてあんた」おじいさんは顔を上げかけましたが、テフテフの顔にちらりと目を落としただけで氣力がつきたのか、すぐにまた下を向いてしまいました。

「ねえ、どうしたの?」

「花や植木の世話をしても、今日いかに美しく咲かせたところで、それもみな明日には魔王のものになってしまつのだ。そのためには苦労して、何の意味がある？」

「でも今日きれいな花を咲かすことができたら、樂しくはない？」

「何を言つてゐるのかね？ どんなに美しいものを見ても、明日になればそれがどれほど美しかつたのか思い出すことすらできないのだよ。美しくも醜くも、過去のものはすべて魔王の所有物となつてしまつ。わしたちにはもつかすかにしか思い出すことのできないかなたへ行つてしまつのだ」

突然テフテフは、あることを思いつきました。「じゃあ悲しみはどうなの？ きれいなものや素敵なもののがみな魔王の所有物になつてしまつといつても、嫌なものや悲しいものも同じように魔王のところへ行つてしまつのなら、おあいこになるんじゃない？」

おじいさんは、ゆつくりと首を横に振りました。「たとえ悲しみであつても、他人に奪われてしまつよりは自分の内に持つておきたいものだよ。あんたのような子供にはわからんことだらうが、自分のものであれば、心の傷でさえ愛しく感じられるものだよ」

「ふうふ」

「のとさく突然、背後から甲高い声が聞こえてきました。「おお、ここにいたか」

振り返るとスケッチでした。道路をおおう石畳の隙間から現れて、テフテフに向かって歩いてくるとこりでました。おじいさんももちろん

んその姿に気がつきました。そしてテフテフが魔王の仲間だとわかつたに違ありません。その日が一瞬ギラリと光りました。でもそれは本当に一瞬のことにすぎず、すぐにまた元のぼんやりした表情に戻ってしまいました。おじいさんがつぶやくのがテフテフの耳に入りました。「まあいいわい。たとえあの子供をぶん殴つてタン口ブを作つてやつたとしても、それも明日には魔王のものになつてしまつのだ。何の意味もない」

立ち止まり、指で自分のひげの先に触れ、スケッチはテフテフとおじいさんを面白がりうに眺めています。「何の用?」とテフテフはスケッチに言いました。

「魔王様がお呼びだ。何かおいしいものを手に入れたとかで、すぐに巣へ戻れとおおせだ。だから早く来い。ゴニゴーンはビゴだ?」

もちろんテフテフは言われたとおりにしました。小さな子供に過ぎないテフテフに、それ以外の何ができるというのです?巣へ戻ると、魔王はいつものように親切に迎えてくれました。テーブルの上には珍しい果物が用意してあり、皮をむいてきれいに切り分けられ、フォークと一緒にテフテフを待っていました。魔王のひざに座り、テフテフはそれを食べ始めました。でも魔王は、テフテフの様子がおかしいことにすでに気づいているようでした。「どうした?」テフテフの髪に鼻先をうずめながら、魔王がささやきました。

「なんでもない」

「ウソをつくな。私にウソは通じぬぞ」でも魔王の声は、怒つている様子ではありませんでした。「話せ」

だからテフテフは、人間の世界で見聞きしたことを話し始めまし

た。最初はほんの少し話すだけのつもりだったのに、話し出すと止まらなくなり、食べかけの果物のことも忘れて、気がついたときにはすべてを話してしまつていました。

「ふうむ」袋のせいで顔は見えないので、魔王の表情はわかりません。でもニーンマリ笑つているらしいのは感じられ、テフテフは彼女のことがいつぺんで嫌いになりました。

「ねえ…」テフテフは口を開きかけます。

「それでおまえは、私にどうじろとこうのだね？」魔王の声は普段と同じで、怒りも憎しみも不信もそこにはまったく感じられませんでした。

「人間たちに過去を返してやつてよ」

「ふん」魔王は楽しそうに笑いました。「なぜ私がそんなことをせねばならん？」

「だつて…」

「人間たちの過去を私は正式に譲り受けたのだ。返してやる義理などないではないか」

「でも…」

「まあ聞け」やはり見ることはできないのですが、今度こそ魔王はあの袋の下でニヤニヤ笑つてゐるに違いありませんでした。魔王はある計画を話してくれました。はじめはテフテフも不審そうな顔をして聞いていたのですが、のみ込めてくるにつれ興奮を感じないで

はいられませんでした。

魔王は人間たちに、過去を条件付きで返してやることにしたのです。その条件というのは、一応返してはやるが、それでも過去は魔王の管轄下にとどまるというものでした。管轄というのは魔王が所有し、ファイルにまとめて管理するということです。だから過去に関する何かを手に入れたければ、人間は魔王に税金を納めなくてはならなくなつたわけでした。それどころか魔王が面白半分にテフテフを『過去管理局』の長官に任命してしまつたので、話はさらにややこしくなりました。

毎朝テフテフはベッドから起き出して、過去管理局のオフィスへと出勤するようになりました。あなたが生きている『今』というこの瞬間も、一瞬後には過去となつてしまします。5秒たつたら5秒前の過去、10秒たつたら10秒前の過去です。人間たちのそういう過去に、テフテフはすべて税金をかけました。未来を見つめ、今まで生きているタイプの人々からはテフテフはお金を見る事ができません。そういう人は過去を振り返つたり、昔のことを思い出したりはしないものです。だけどそんな人はほんの一握りで、無視してもいい数に過ぎません。過去管理局の出納部は、いつも大儲けができました。

ただテフテフも、5分前や10分前といった短い過去に対しても税金をかけることはしませんでした。あまりにも数がありすぎて、事務手続きが多くなるからです。あなたたつて、友達とおしゃべりをしながら3分前の会話を思い出すためにいちいち申込書に記入し、街中に何百カ所もあるとはいえ管理局の支所まで行き、お金を払つて自分のファイルを閲覧してなどいられないでしょう？ そんなことをしている間に、自分が何のために管理局へ行こうとしていたのかということだつて忘れてしまつに違ひありません。

だからテフテフは1年以内に限り、過去を使用したり思い出したりすることを自由にしたのです。これを『過去の时限つき自由化』といいますが、魔王とも相談してこれを認めることにしたのです。この決定により過去管理局の事務処理量を大幅に減らすことに成功したので、かなりの行政改革といえました。

でももし1年以上前のことを思い出したいと思ったら、これはもう大変です。あなたは管理局へ出向き、テフテフのポケットへお金を入れなくてはなりません。

あると、かすかだけれど魔王のスカートの中から泣き声のようなものが聞こえてくることにテフテフは気がつきました。女の声で、誰かがしくしく泣いているようです。テフテフを足元で遊ばせながら、つこうつきまで魔王は何かの本を読んでいたのだけれど、今はうたたねをしています。その長いスカートの中から聞こえてくるのです。

好奇心に駆られ、テフテフは耳をすませました。小さい声だけれど、たしかに聞こえています。間違いありません。テフテフはスカートのすそをほんの少し持ち上げてみました。少し迷いはしたのだけれど、思い切ってその中に飛び込んでみたのです。目の前は真っ暗になり、以前と同じような落下があつて、テフテフは女王ジユディのトイレについてことができました。

トイレといつても広々としています。2回田だからもう慣れていて、部屋の中心ではなく、できるだけ邪魔ものがなさそうなすみっこにテフテフはうまく着地することができました。ここで女王ジユディのあだ名について話しておきましょう。彼女のあだ名はなんと『カメムシ女王』といふのでした。カメムシといふのは、『ガネムシを丸く小さくしたような虫で、指でつづくとものすごくくさいオナラをします。おまけに害虫でもあり、畑の木や植物の葉を食べて大きな被害を出すことのある嫌われ者です。でも女王ジユディはこのカメムシが大好きで、ペットとして自分の部屋で飼つているそつでしたが、このときテフテフにはその理由がわかつたわけでした。

「おじで」ややしく手を引いて、女王はテフテフをトイレから連れ出しました。廊下を歩き、自分の部屋へ連れていってくれました。

そしてペットのカメムシがいる虫が「こ」を見てくれたのです。カゴの内部にはやわらかい土を敷きつめ、食べられる草を植え、誰かの手作りだらうけどボール紙製の小さなお城が置いてあります。その城の中にカメムシが一匹ぽつんといふとこは、奇妙な眺めではありました。そしてこのカメムシが女王ジユディのただ一人の弟その人であると聞かされたとき、「どうしてこのカメムシがあんたの弟なの?」とテフテフが口にしたのは当然だと思います。

「語れば長い話になる」女王は、テフテフをそばのイスに座らせました。自分もその隣に座ります。

「どんな話?」

女王は語り始め、少し長かつたけれど、あまり面白い話ではありませんでした。彼女の弟は有名ないたずら小僧で、ある田舎の庭のベンチで気持ちよく昼寝をしていた野良猫に水をぶっかけるといふいたずらをしたのはいいのだけど、それが何と有名な魔法使いフンメルが変身した姿で、もちろんフンメルは腹を立て、罰として魔法をかけて、弟をカメムシの姿に変えてしまつたということでした。フンメルの怒りはまだとけてはおらず、10年たつた今でも弟はこの姿のままでいるということでした。

「当然のむくいだ」という気がしなくはなかつたけれど、女王は本当に悲しんでいる様子なので口にはしないことにしました。その代わりテフテフはこう言いました。「何とかフンメルに謝つて、許してもらひう」とはできないの?」

「できぬ」女王は首を横に振りました。「弟を許さぬままフンメルは去年死んでしまつた。135歳だったが、バッタの天ぷらを食べ過ぎて、腹を壊したのが死因だった」

「バッタ？」

「つまら。食べた」とはないのか？」

「ううん。じゃあもうあなたの弟を元にもどす方法はないの？」

「一つだけある」女王の目がきらりと光つたような気がテフテフはしました。「確かにフンメルは強力な魔法使いであった。だがこの世には、どのように強力な魔法でも解くことができ、弟を元の姿に戻すことができる物が一つだけあるのだよ」

「何なの？」

「それがなんと、魔王の靴下留めなのだ」

「靴下留めって？」

「知らぬのか？」女王は不思議そうな顔をしました。「ずり落ちぬように、レディが絹の靴下を留めておくためものだ。ほれ見せてやろう」

スカートをまくりあげ、女王は見せてくれました。太ももの付け根までむき出しになつたので威厳あふれる姿とは言ひがたかつたけれど、弟を助けるために必死になつていて気がつかないようだつたし、テフテフも指摘する気にはなりませんでした。「靴下留めって、ガーターのことなんだね」テフテフは言いました。

「トタではそう呼ぶのか？ まあよい。とにかくこれのことじゅう」

「魔王の靴下留めには、本当にそんなにすげい力があるの？」

「あらとも」再び女王の皿がきらりと光りました。

だからテフテフは、魔王の靴下留めを手に入れなくてはならなくなつたわけでした。だけどどうすればいいのか、見当もつきません。確かにテフテフは、魔王のスカートの中にはしおつちゅう出入りしていました。今田だつて魔王の巢へは、彼女のスカートの中を通り帰つていくのです。でもそのことと、靴下留めを手に入れることはぜんぜん違います。頭を悩ませながら、テフテフは帰路に着きました。

この夜も、魔王はいつものようにテフテフの部屋へやつてきました。彼女の様子はいつもとまったく同じでしたが、テフテフは少しぞきぞきしていたに違いありません。テフテフをひざに乗せ、いつものように魔王はお話を始めました。適当に相づちを打つていたけれど、テフテフの耳には何一つ入ってはいませんでした。ただタイミングをはかつていたのです。

とうとうその瞬間が来たようでした。魔王が気を抜いた一瞬、テフテフはそのスカートの中に飛び込んだのです。いつものように暗闇の中へ足から飛び込んでいったのですが、今回は彼女の靴下留めを手に持つていることが違いました。どんな形だったかを思い描き、昼間のうちから繰り返し頭の中で練習していたのです。うまい具合に靴下留めはさつと外れてくれ、手の中に握ったままテフテフは落下に身をまかせることになりました。

トイレの中でもう待ち構えていて、女王はすぐにテフテフをカムシのいる部屋へと連れていきました。部屋の中はひとけがなく、ひつそりしています。虫がにに近寄り、身動きもしないカメムシを

「それよりも例の靴下留めは持つてきたのだな？」
「それ？」
「おお、あれ？」テフテフは指先にぶら下げる見せました。

「それよりも例の靴下留めは持つてきたのだな？」

「おお、あれ？」テフテフは指先にぶら下げる見せました。

「よおし」女王はうれしそうに笑います。

「早く弟を元の姿に戻してやらないと」

「弟？ 何の話だ？」

「だつてこのカメムシでしょ？ 悪い魔法使いの魔力にかかって…」

驚いたことに、女王は大きな声で笑い始めたではありませんか。その声が部屋の中に響きます。「ああ、あの作り話のことか」

「作り話？」

「やうやう。それをお寄こし」強い力でつかまれ、テフテフはあつと
いう間に靴下留めを取り上げられてしまいました。

「僕にウソをついたの？」

「子供は黙つとれ」女王はテフテフを大きく突き飛ばしました。床に転び、背中を強く打つて、テフテフはしばらく息もできませんでした。その間に女王はスカートをまくりあげ、靴下留めをさつと自分の足にはめてしまつたのです。それだけではなく、大きく口を開

けて女王は笑い始めたではありませんか。

「ついに私は魔力を手に入れたぞ」

「魔力って？」床の上に転がつたまま、テフテフは目を丸くしていました。

「これのことさ」一步近寄り、女王はテフテフを見下ろしました。思わず下がつて逃げ出そうとしましたが、壁に邪魔をされて立ち上がるこどもできませんでした。

「何をするの？」

「おしゃべりなクソガキよ、口を閉じておまえは力キになれ」得意満面で人差し指を突き出し、女王はテフテフを指さしました。テフテフは怖くなりました。今にもその指先から魔力がわき出して、自分に飛びかかってきそうな気がします。そうなつたら、彼はあつという間に力キの姿に変えられてしまうに違いありません。海水を満たした水槽の中に入れられて女王のペットにされるか、悪くすればフライにされ、夕食に食べられてしまつかもしれません。

ぎゅっと目を閉じ、自分の手足が短くなつてやがてなくなり、全体が固いカラに包まれてしまつのをテフテフは待つっていました。でもおかしいのです。いくら待つても何も起こりません。テフテフは元のテフテフのままで、目を開いて、おそるおそる見上げることになりました。意外そうな顔をしているのは女王も同じでした。どうなつているのだろうという表情で、自分の指先を眺めています。「どうなつてるの？」とうとうテフテフは口を開きました。

「私にもわからぬ」機嫌の悪い声で女王は答えました。だけどその

とか、部屋の中に突然別の声が響いたのです。

「それは当たり前だ」

女王とテフテフが同時に振り向くと、部屋のすみに魔王が立っているのが目に入りました。いつものように黒い袋をかぶった姿ですが、あきれたような目でこちらを見ているような気がします。「何だと？」もちろん女王はにらみつけました。

「その子は小ちすぎて」魔王はテフテフを指しました。「まだ右と左の区別がきちんとついていないのだ。左の靴下留めでは何の意味もないではないか」

「おまえ」耳を強くつまみ、女王はテフテフをむりやり立ち上がらせました。「左ではなく右の靴下留めだと、あれほど何回も言つておいたではないか。食事のときにナイフを持つほうの手だ」

女王はすでに怒りで顔を真っ赤にしていましたが、魔王の次の言葉を耳にして、もつと赤くなりました。「あまり責めるな。その子は左利きだ」

「なんと」

「つまりだな」魔王はうれしそうに笑いました。「その子が左利きだつたおかげでおまえの陰謀は失敗に終わり、私は魔力を失わずにすんだというわけだ」

歯ぎしりをしている女王をその場に残し、テフテフと魔王は五分後には魔王の巣へと帰り着いていました。怒られるのではないかとテフテフはどうぞきしていたのですが、魔王は機嫌を悪くした様子

さえありませんでした。自分の部屋へ招き、お茶をいれて飲ませてくれたほどです。ただ靴下留めは女王の部屋に残してきてしまったので、魔王も別のものを探してきて太ももにつけなくてはなりませんでした。これ以後、魔王が左右そろつていらない靴下留めをいつも身につけているようになったのは、じついう事情があつたからです。

こんなことがあつても、魔王はテフテフに腹を立てたり、しかりつけたりはしませんでした。だまされやすくお人よしで、でも他人のことを思いやるその性格が魔王も気に入っていたのかもしません。また以前と同じような暮らしが始まり、テフテフは楽しく過ごすようになりました。

あるとき魔王が思いがけないことを口にしたので、テフテフはひどく驚きました。なんと「人間たちに過去をすべて返してやれ」といつのです。テフテフにはわけがわかりませんでした。

「どうして？」

「理由などどうでもよい。おまえはただ言われたとおりにおし」魔王の声は固く、これ以上いくら質問しても何も答えてくれないだろうとこりこりとは、テフテフも感じることができました。だから口を閉じ、「うそ」とうなずくほかありませんでした。

翌日、文字通りあつという間に過去管理局のオフィスはすべて閉鎖されてしましました。國中に何千カ所もあつたものが全部です。入口は閉じられ、鍵がかけられ、事務を取つていた魔物たちも全員が魔王の巣へと引き上げていきました。そばで眺めていたテフテフも感心するほど魔物たちの行動は統制が取れ、少しの遅れもミスも

なく撤退を完了することができました。人間の世界にも、これほどきちんとした組織は存在しないかもしません。

過去を返してもらつてその後人間たちがどうしたのか、もちろんテフテフは興味を感じていました。だからこつそり人間の世界へ行ってみることにしたのです。仲のいいユニコーンが、すぐに連れて行つてくれました。

人間の世界に着き、ユニコーンの背中から降りて、テフテフは目を丸くすることになりました。町中が人々でいっぱいだつたからです。通りも路地も人であふれ、みな浮かれ騒ぎ、喜びを身体の内側におさめきれずにあたりを走り回り、手をつないで輪を作つてダンスをしている人たちまでいました。まるで年に一度のお祭の日のような騒ぎだつたのです。

驚いて、テフテフは思わずキヨロキヨロ見回してしまいました。人々は職業も服装もみなまちまちで、まさかと思って振り返ると王宮の門までが大きく開かれ、誰でも自由に出入りできる状態になつてゐるではありませんか。門番はどこにいるのだろうと思つたら、人々の間に混じつて同じように浮かれ騒いでいる姿を見つけることができました。

テフテフは町の中を見て歩きましたが、どこでも同じようなお祭り騒ぎが進行中でした。国民が全員繰り出しているに違いないと思えるほど道は混雑し、店も開いていますがカフェなどはお金も取らず、道ゆく人々にただでコーヒーを勧めているあります。勧められた人も楽しそうに受け取り、カップを口にあてています。過去が戻ってきたことがそれほどうれしかつたのでしきう。今では国中が同じようなお祭り騒ぎをしているのに違ひありませんでした。

「もうよいだらう? 戻つておいで」不意に耳元で魔王の声が聞こえたので、テフテフは驚きました。キヨロキヨロしたのですが、もちろん姿は見えません。でも次の瞬間には誰かの手で背後からえりくびをつかまれ、足の裏が地面を離れたかと思うと、もう魔王の巣の中にいるのでした。まるで猫の子のようにスカートの中から引っ張りあげられ、テフテフは床の上に置かれました。

じつして過去管理局長官の任を解かれ、テフテフも魔王の巣の中で一日を過ごすようになりました。真夜中にテフテフの部屋へやつてくるだけでなく、魔王は毎晩にもテフテフを自分の居間へ呼ぶようになります。どこかの王宮にでもありそうな部屋そのままというのではありませんけれど、それでもきちんと整えられた広い部屋です。窓が一つもないことは巣の中の他の部屋と同じですが、ここにはもちろん鏡など一つもありませんでした。きれいな模様の織り込まれた布で壁は飾られ、家具類も磨きたてられていますが、木目模様の見える家具ばかりが選ばれ、お茶を飲むときのスプーンまでが白い陶器製のものを使っているといつ徹底ぶりだったのです。

テフテフも魔王も本を読むことが好きだったのです、やわらかいソファーに並んで腰かけ、思い思いの本に顔をうずめて長い時間をすごすこともあります。部屋の中はとても静かで、聞こえてくるのはときどきページをめくる音だけです。テフテフの前ではもちろん魔王はいつもあの黒い袋をかぶっているのですが、あるとき魔王が本をパタンと閉じ、そばのテーブルの上にそっと置いたことにテフテフは気がつきました。読書に疲れてしまったのかもしれません。

でもテフテフはそうではなく、読んでいた物語が最も面白いシーンにさしかかったところでした。だから本を閉じることなど考えられず、そのまま読み続けたのです。

二つの間にか時間がたつていたようでした。なんとなく顔を上げたとき、イスのひじ起きにもたれかかって魔王が居眠りをしていることにテフテフは気がつきました。

テフテフは胸がどきどきし始めました。深く眠っているようで、魔王の体はぴくりとも動きません。そつとかがんで、袋を開いた六ごしにのぞき込むと、まぶたがぴたりと閉じているのを見ることができました。つばを飲み込み、音を立てないように注意して、テフテフは本をテープルの上に置きました。そして息を止め、ゆっくりと魔王に近づいていったのです。

テフテフはそっと手を伸ばしていったのですが、その目的は明らかでした。居眠りをしているすきに袋を持ち上げ、魔王の素顔を見てやるうところでした。

最後まで魔王は目を覚ますことはありませんでした。テフテフは成功し、魔王の顔を見ることができたわけです。背が高いせいでの解して、少し意外だったのですが、テフテフが思っているよりも魔王は若いようでした。ドレスのそで口から見えている手やのどのあたりの感じから、魔王が白い滑らかな肌を持つていることはテフテフも知っていました。魔王の素顔はそれに似つかわしく、テフテフよりはもちろん年上だけれど、それでも若い娘のものだったのです。醜い顔であるなどどこでどうやって思い込んだのか、彼女の顔は本当に美しく、美術館で見ることができる古い油絵の乙女のようです。まゆは濃く、額の中央でやわらかいカーブを描いています。その下にある目は、今はまぶたを閉じているけれど、長いまつげがまるでシユロの葉のようです。鼻は小さく、その先はつんとがっています。紅を引いているわけではないけれど、肌が白いせいで唇はいつそう赤く見えます。

ため息をつき、テフテフはそつと元通り魔王の顔に袋をかぶることができました。魔王は気がつきもしませんでした。何分かして魔王が自然に目を覚ましたときにも、テフテフはずつと本を読んでいたふりを続けていましたが、頭の中ではまったく別のことを考えていました。

女王ジユテイというのは、なかなかあきらめない人なのかもしぬ
ません。あるとき突然、魔王のスカートの中から耳障りな騒音が聞
こえてくるようになつたのです。騒音というのは文字通りの意味で、
メロディも何もなく調子はずれにやたらとトランペットを吹いたり、
鐘や太鼓をチンチンドンドン打ち鳴らしたりするのです。そういう
音がスカートの中から聞こえてきて、はじめのうちは魔王もテフテ
フも笑つていいことができたのですが、女王が爆竹を鳴らしたり、
猫を何匹も連れてきて、わざと引っかきあいのケンカをさせたりす
るようになるにいたつては、とつとう我慢ができなくなつてしまい
ました。

魔王と顔を見合させ、大きくため息をついたあとで、テフテフは
スカートの中へ「ごそごそともぐりこんでいくことになりました。い
つもと同じような落下があり、魔王のトイレに到着したのですが、
ケンカしている猫たちを踏んづけないように注意しなくてはなりま
せんでした。バランスを崩してテフテフが転びそうになるのを、女
王は笑つて眺めています。「何の用なの?」猫のしつぽを踏みかけ、
もう一度バランスを崩しそうになりながらテフテフは顔を上げまし
た。

「いやあなに、過去を返してくれたことへの礼と、ウソをついてだ
ましたことのわびをしようと思つてな」女王は答えました。

「わびつて、靴下留めのこと?」

「やうだ」

「そんなことよかつたのに」

「やうはいかぬ」手を引いて、女王はテフテフをトイレから連れ出しました。すぐに広間へと着いたのですが、そこではなんと宴会の準備が整っているではありませんか。テフテフは目を丸くしましたが、おいしそうな料理や新鮮な果物、すてきな甘い匂いをさせている大きなケーキなどが目に入ったときには、思わずにつこりしないではいられませんでした。テフテフと女王だけではなく、きれいに着飾った人々が十人ほどすでに席に着き、一人を待っていました。男も女もいましたが、顔を見て、女王の下で働いている大臣たちであるとすぐにテフテフにもわかりました。

一番の上座にテフテフを座らせ、宴会が始まりました。テフテフは気がつかなかつたのですが、丸い形をした大きなテーブルに座る人々の順番はあらかじめ慎重に考えられていましたに違ひありません。右側はもちろん女王だつたけれど、テフテフの左側には見たこともないおじいさんが座つていたのです。

おじいさんは背が低く、年のせいで背中は曲がり、頭もすっかりはげています。白いひげは長く、胸にも届くほどです。大きな耳が、まるでティーポットのつまみのように左右に飛び出しています。テフテフはすぐにこのおじいさんに興味を持ちました。女王が紹介してくれました。「これはキャッシュ博士といって、この国で一番賢いお人じや。いつもいろいろなことで私の相談に乗つてくれてある」

「なんとおそれ多いお言葉」キャッシュ博士は遠慮そうに首を左右に振りました。「私などがいかにして陛下のお役に立てましょ」

「謙遜はもうよ」機嫌よれそつに笑い、女王は歯を見せました。

「博士って、何を研究している博士なんですか？」食事が始まり、口も軽く機嫌がよくなつてテフテフは言いました。

「神話や魔力に関することで」それにます、テフテフさま

「魔力って、魔王のことも含みます？」

「もちろんです」博士は大きくなづきました。

「じゃあ僕、質問があります」

「ほう」博士は笑いました。「何なりと私でお役に立てることでしたら？」

隣で聞き耳を立てていた女王の目がこのとききらりと光りましたが、話に夢中になつてているテフテフは気がつきませんでした。「魔王は、どうして自分は醜い顔をしていると思い込んでいるんですか？」

「おお、それはこそこそか難しい質問ですね

「そうでしょうね」

「それにお答えする前にテフテフさま、あなたは魔王の素顔を見たことはありますか？」

「えっ？」意外な質問だったので、テフテフは答えにつまってしましました。そつと見回すと、部屋の中の全員が自分に注目しているようです。女王だけは知らん顔でステーキにナイフを入れ続けていますが、彼女も自分の言葉には聞き耳を立てているに違いないとい

う気がしました。だけどテフテフには、何もいつわつたり隠したりする必要はなかつたのです。

「うん、ありますよ。同じ巣の中に住んでるんだもの」

部屋中の人々がつばを飲んだようでしたが、キャッシュ博士だけは平気な様子で、眉を上げもしませんでした。すでにナイフを置き、女王までがテフテフを見つめていたのですが。

「ほう。では魔王はどんな顔をしておりました? キャッシュ博士の声が部屋の中に響きました。

「なぜそんなことをきくんです?」テフテフの声は、じりすよつな笑い声に似ていたかもしません。

「好奇心とこひやつですかな」キャッシュ博士は微笑みました。

「へえ」テフテフもうれしそうに笑いました。

「それで魔王とはじんな顔をしてくるのです?」キャッシュ博士は繰り返します。全員が再び息をのんだようだ、部屋の中はぴたりと静かになりました。でもテフテフが口を開く前に、女王の声が響きました。

「それはそうとテフテフ、知つておるか? 私の母は魔王にも負けぬ偉大な鍊金術師だつたのだぞ。博士は覚えておるつ?」

「よく覚えております」博士はつづきました。「時間の流れの中に隙間を見つけ、昨日と今日の間に広大な空間を発見されたのも先代の女王陛下でしたな」

「そのとおり」

「その人の魔力って、そんなにすごいかったんですか?」 今度はテフテフが質問する番でした。

「はい」と博士。

「その人が見つけた、あの…なんだっけ? 昨日と今日の間の隙間って、どうなったんですか? 今でもあるんですか?」

「あるとも」女王が言いました。「なあテフテフ。おまえが生まれて育った家には、使われていない地下室や壁の隙間などはなかったかね?」

「あつたと思つよ」

「まつておくと、そういう隙間には何が起こるね?」

「ええつと、小鳥が巣を作つたりするかな?」

「小鳥であればまだよい。だが巣を作るのがネズミであつたりコウモリであつたり、場合によつては氣味の悪いトカゲだつたりもあるのさ」

「トカゲ?」

「だから田付の隙間にも同じことが起こつたのだ。どこからやつてきたのか魔物どもが住み着いてな」

「魔物？ 魔王の巣のことなの？」

「違う」女王は首を横に振りました。「あそこに魔王の巣が作られるのはもう少し後のことだ。魔物たちがどこからわいてくるのかはさすがの母にもわからなかつた。いろいろと努力したのだが、日付の隙間から魔物を追い散らしたり、どこか遠いよその世界へ封じ込めたりすることもできなかつた。あの時代はそれはそれは大変だつたのだぞ。時計が真夜中の12時を打つたびに、日付の隙間から迷い出た魔物や怪物たちが町中に姿を現したのだ。

「いづらがまたいたずら者でな。人を傷つけたり殺したりすることはなかつたが、農家の畠は荒らす、人の家の食料庫に忍び込んで中身を空にする。子供の寝室に忍び込んで怖い話を聞かせ、トイレに行けなくしておねしょをさせる」

「おねしょ？」

「笑い事ではないぞ。あるときなど、夜が明けると同時に何十万人もの母親たちがぬれたシーツをいっせいに干さねばならぬ破目になつた。天気のいい日だったからよかつたが、もし雨でも降つていたら……」

その光景を想像して、テフテフは思わずすつと笑つてしましました。それが耳に入つたのでしき。女王がにらみつけてきました。「だから笑い事ではないといつておるのだ」

「それでの、その後どうなつたんですか？」まじめな表情をあわてて装い、テフテフは言いました。

「日付の隙間の中に広大な空間を発見したのは母だ。責任を感じ、

母はなんとか対策を考えようとした。だが魔物たちをあそこへ押し戻し、一度と出てこられないようにする方法はどうしても見つからなかつた。連中を閉じ込めておけない以上、母は別の方法を考えるしかなかつたのだ

「どうしたの？」

「田付の隙間に中に、母はまず巨大な城を建てさせた。おまえが『魔王の巣』と呼んでいるもののことだ」

「へえ」と聞いたかつたけれど、驚きのあまりテフテフの口からはどんな言葉も出てしまませんでした。女王が続けます。

「だがそれだけでは十分ではない。母は魔物たちに女王を与え、その女王の手で魔物を治めさせることにしたのだ。そのために母は私の双子の妹を用いたのだよ。テフテフ、おまえは見たのであるう？だから魔王は私とそっくり同じ顔をしているのだ。一卵性の双子だつたからな、よく似ているのは当たり前だよ」

「えつ？」もちろんテフテフは田を丸くしていました。

「ふん」振り返つて博士の顔を見て、女王は笑いました。「やはりわざと驚いてはおらぬよつだな」

「何が？」意味がわからず、テフテフはキヨロキヨロしました。女王につられ、部屋中の視線が博士のほうを向きましたが、博士は平気な顔をしています。

「何のことですかな？ 陛下」

「自分が私の双子の妹であるということをおまえはとっくに知っていたのであるう、と私は言つてゐるのだよ」

「どうごいことですかな？ 私にはさつぱり…」 博士は少し困った顔をしています。

「妹よ、芝居はもうよいから姿を見せい。本物の博士はどこへやつた？ 本物のキャッショ博士はそのように謙遜をする人物であるものか。傲慢で不遜でどうしようもない男であるぞ。まあ妹よ、本物の博士はどこだ？」

「このとき、テーブルの下からゴトゴトと奇妙な音が聞こえることにテフテフは気がつきました。しつかりとした大きなテーブルで、真っ白なテーブルクロスがかかっているのですが、誰かが下に隠れて、テーブルの足をたたいてでもいる感じなのです。それも強く勢いよくではなく、いかにも手足をしばられて不自由な中でからうじてという様子です。

テーブルクロスを持ち上げ、テフテフは下をのぞき込みました。すると、しばられて床に転がされている男と目が合つことになりました。頭のはげたかなりの年の老人で、怒りに満ちた血走った眼で見つめ返してきます。顔かたちはもちろんキャッショ博士とまったく同じです。驚いて顔を上げ、テフテフは自分の左側に座っている人物と見比べてみようとした。するともう一度びっくりしたのは、左側の人物はもはや博士の姿はしておらず、濃いブルーのドレスを身につけた魔王その人だつたことです。それに魔王は、それまでずつとかぶつていた黒い袋を脱ぎ捨て、部屋の中に素顔をさらしていました。さつそく女王が声をかけました。

「元気そうで何よりだな、妹よ」

魔王は機嫌悪そうにこちらを振り返しましたが、女王は気にする様子もありませんでした。「テフテフ、本物のキャッシュew博士はこのテーブルの下にいるのか?」「

「うん」

「まあよー」女王は笑いました。「小うるさい男であるから、そこで静かにさせておこう。そのまつがよほびよこわ」

「姉上」魔王が口を開きました。「私が自分の出血を探り当てたことをなぜ知つておる?」

「ふん」女王は鼻を鳴らしました。「おまえはそのために過去管理局などというものを作ったのである!」過去の秘密を探り出すのにそれ以上の方はないからな。誰のどんな過去でもおまえは盗み見ることができたはず。私の過去について書かれたファイルにも当然田を通したであろう!」

「しかし……」

「やつやつておまえは自分の出血を知るにいたつた。目的は達したわけだ。ならば過去管理局など無用の長物。さつさと解散してしまつたのも当然だろ?よ」

「じゃあ僕は、何も知らずにただ働きをしてたの?」とテフテフが思わず大きな声を出したとき「onso!onso」と音が聞こえ、本物のキャッシュew博士がテーブルの下からやつと姿を現しました。何とか自力で繩を解くことができたのでしょ?。女王がとぼけた声を出しました。

「キャッシュ博士、今日の『』機嫌はいかがかな?」

「よろしいわけはありますまい。ああ痛かった『魔王』をこうみつけながら、博士は自分の肩や背中を手で押さえていきます。さつと縄が強く食い込んでいたのでしょうか。」

「しかし女王陛下」キャッシュ博士は表情を変えました。「今はわしの体のことなどを話していく場合ではありませんまい。すぐにもあの話を始めましょうが」

「もうだつたな」女王はうなずきました。「妹よ、おまえとテフテフをここへ呼んだのは、実はその話をするためだつたのだ。よいコースでもあるしな」

「よいつて?」とテフテフが不思議そつな顔をすると、珍しくも女王は微笑み返しました。

「私と妹には特によい『コース』はあるが、おまえたち一般の国民にひとつもよいことであるのは間違いなかろう」

「どうして?」

「説明するよりも見せたほうが早い。ついてくるがいい」女王は立ち上がり、もちろんテフテフたちはついていくことにしました。ぞろぞろと部屋を出て廊下を行き、地下へと続く急な階段を下りていったのです。途中で何回もひじのようにつづく曲がる階段でしたが、とうとう終点につきました。終点は学校の教室ほどの大きさの部屋で、地下だから窓は一つもありません。薄暗い電灯で照明されていましたが、もしかしたらそんなものは必要なかつたかもしません。小さな墓石以外は何もなく、床には四角い石畳が敷き詰めてあるの

ですが、その中央あたりがぼんやりと赤く光っているのです。いかにも石が高熱を発しているという感じで、立ち止まってテフテフは額の汗をぬぐつゝになりました。

「あれが母の墓なのか？」魔王が口を開きました。

「自分の死後はこのように埋葬せよと遺書に書かれていた。だから私はそうした。墓を作るには奇妙な場所だと思ったが、故人の意思なのでな」女王が言いました。

「ねえ」突然心細くなつて、テフテフは魔王のドレスのそでを引っ張りました。

「どうした？」魔王が見下ろします。

「あの光つて、なんとなく怖くない？」

「何を下らぬ」と少し怒つた顔で、魔王が振り返りました。

「だつてお墓とこつよりも、まるで噴火の前触れみたいな感じだよ

「何を下らぬ」とを言つ「魔王は鼻を鳴らしました。「近頃の子供ときたら……」

ところがそのセリフは途中で止まってしまいました。ゴトーンゴトーンと重々しい音が突然地下室の中に響き渡つたからです。テフテフを含めて、全員が息をのむことになりました。床に敷き詰められた石が強い力で押し動かされ、互いにぶつかり合つて立てた音だつたのかもしれませんがすぐに消え、もう何も聞こえなくなつてしましました。墓石にはあの薄赤い輝き以外は何もなく、何か変化があつ

た様子は見られません。ほっとため息をつき、テフテフたちは口を開こうとしました。でも結局、誰も何の言葉を発することもできませんでした。

音を立て、予告もなく墓石がズルリと動いたのです。こんな地下にあつても女王の墓にふさわしい重さが何百キロもある大きなものですが、それがまるで風に押されたヨットの帆のように、1メートルばかり横へと移動したのです。そして気がつくと、墓石があつた跡には四角い穴が黒々と口を開けているではありませんか。テフテフたちは顔を見合わせ、博士は女王の背後に隠れ、魔王はテフテフの肩を指先が食い込むほど強くつかんでいますが、テフテフも痛みすら感じていないうえ。火山のよつだつた石の輝きはいつの間にか消え、部屋の中が地下室にふさわしくひんやりとなっていることに誰一人気がついていませんでした。

「姉上」しばらく間があつてから、やっと魔王が口をきました。
「あの墓石の下には、あのような階段が以前から作つてあったのか？」

背伸びをし、テフテフもおそるおそるのぞき込んだのですが、確かに魔王の言うとおりでした。狭くきつい階段で、一人がやっと通れるだけの幅しかなく、一人の人がすれ違うことはできないでしょう。まるでテフテフの家にあつた地下のワイン倉へ降りてゆく階段と同じようなものでしたが、あれよりもずっと長く、勇気を出してのぞき込んで、踏み段が何十もまつすぐに続いているだけで、その先に何があるのかは暗すぎて見ることができません。

「墓の詳しい構造については、女王が口を開きました。『私もよくは知らんのだ。母の遺書には図面が添えてあつてな。私はそれを建築家に渡し、その通り作らせたまでだ。即位の準備で私もひどく忙

しかつた。博士は何か聞いていないか?「

「いいえ」キャッシュ博士は首を横に振りました。「先代陛下の埋葬には、わしは関わつておりませんので」

「やうやうであつたな。忘れておつた」女王はうなずきました。

「それで姉上」魔王が言いました。「これから何が起つむのか、私たちにはここに立つたままで待つのか?」

「あの階段を下りていってみる?」テフテフが指さしました。

女王と魔王は顔を見合させました。キャッシュ博士までが困った顔をしていましたが、悩む必要はなかつたのかもしません。このとき地下深く、あの階段のずっと下から、かすかではあるけれど足音が聞こえ始めていることにテフテフが気づいたからです。「あれは何?」

耳をすませ、女王たちもそれに気がつきました。

ゆつくつとしたペースですが、足音はだんだんと大きくなつてきます。明らかに誰かがあの階段を上つてきつつあるのですが、重々しい大男というのではなく、いかにも体重の軽い人物、それもなぜか女だという感じがします。だけど恐ろしくて、その人物がどうとう階段の出口に姿を現すころにはテフテフは魔王のスカートの後ろに隠れてしまい、顔だけを出してのぞき見ていました。

階段を上がり終え、足音の主がとうとう地下室に姿を見せたのですが、その人の顔を知つていることにテフテフは自分でも驚きを感じました。だけどその理由はすぐにわかりました。この国の紙幣に

肖像画が印刷されている顔だから、テフテフも普段から田にしていました。ということは、これが先代の女王に違ひありません。

「おまえは…」先代女王もその姿に気づいたようです。同時にテフテフは首を曲げ、魔王を見上げることになりました。フンと鼻を鳴らすのが耳に入つたからです。テフテフは片方の眉を上げかけましたが、魔王の態度も理解できる気がしないでもありませんでした。先代女王と女王ジユディはすでに言葉を交わし始めています。「母上、なんとお懐かしい」とか「娘、おまえも大きくなつたな」などと言つてゐるのが耳に入ります。

「ふん」と魔王はもう一度大きく鼻を鳴らしましたが、テフテフがそつと指をからませると気づき、下を向いてかすかに微笑みました。でもそのとき先代女王が声を上げたのです。

「そこにいるもう一人の娘は誰だ？ おまえとまつたくそつくりな顔をしているが

先代女王は魔王を指さしていたのです。意味に気づき、女王ジユ

ディは少し顔色を変えましたが、何を言つ暇もありませんでした。その前に魔王自身が口を開いたからです。「生まれた直後に、おまえのせいで名もつけられぬまま魔王の巣へと送られた哀れな娘だ。魔物たちが私の育ての親なのだ」

「おお」心を動かされた様子で、先代女王の表情が変わりました。「そうであったか。だがおまえは名無しであったわけではないぞ。ちゃんと名づけた後で私は日付の隙間へと送ったのだ。他に方法はなかったのだと言つても気持ちはやわらぐまいが、おまえは決して名無しなどではないといつことだけは覚えておくがいい」

「口だけなら何とでも言えるわ」魔王は怒った顔をくすりとしません。

「キヤッショ博士」不意に先代女王が話しかけました。「おまえなら覚えておひづり? 私はこの娘をなんと名づけた?」

「はい」キヤッショ博士は一步前に進み出ました。「わしのような者を覚えていてくだりつて、光栄に存じます」

「忘れるものか」先代女王は笑いました。「それで私はこの娘をどう名づけた?」

「はい。この老いぼれの記憶が間違つておらぬなら、たしかオルカをまと」

「オルカ?」と大きな声を上げたのはテフテフです。

先代女王はうなずきました。「海に住む中で最も強く、気高い生き物だ。魔物たちに囲まれても力強く生きていいくことができるよう

に願つて名づけたのだ

「結局いつも日付の隙間のしつねぐいの話に戻つてくるのではない
か」魔王は不満そうでした。

「しかし少なくとも名無しではありますん」キャッシュ博士が言い
ました。「それに、決して醜い顔をしているのでもない。姉様と同
じ美しい顔をお持ちです」

「私のほうが美人じゃ」女王が抗議しました。

「バカ姉が」魔王はつぶやきました。

「ねえ」手を引いて、テフテフは魔王を先代女王のそばへ連れてい
こうとしました。でも魔王の足は動く気配がなく、テフテフはあき
らめるしかありませんでした。

「それはそうとオルカ、おまえは魔王なのでありますへ」先代女王が
声を上げたので、みな少し驚きました。

「そうなのであります？」金圓に見つめられ、先代女王は微笑みまし
た。

「ならばどうした？」魔王がにらみ返します。

「どうもせぬ。ただ私がおまえをオルカと名づけたといつ証拠を見
せてやるつと思つてな

「そんなものがあるものか」

「あるや。口付の隙間へ送るとき、魔力の元となる靴下留めを私は持たせてやつた。今でも身につけておるや。」

「 もうひど 」 あつと無意識にでしようが、魔王がスカートの上から太ももを押せたことにテフテフは気がつきました。

「 その靴下留めに私はおまえの名を書いておこたのだ。おまえの名がオルカであり、かつ私の娘であるところじゅとしてな 」

「 うわだ 」 魔王は大きな声を出しました。 「 なんだぞ 」 にも書かれ ておらぬぞ 」

「 よく見ておらぬからだ 」 先代女王は笑いました。

「 毎日身につけておるのだ。少しわかりにくい場所に書いてあるところじゅ けます。 」

「 探し方が悪いのだ。少しわかりにくい場所に書いてあるところじゅ ともあるがな。貸してみよ。教えてやる 」

「 おまえのいい加減なうそになど付き合つ暇はない 」

女王ジユディと顔を見合わせ、先代女王はもう一度笑いました。

「 おまえの妹はこちちか頑固であるな 」

「 つかどうかはすぐにわかる 」 とだ。靴下留めを母上にお渡しせい 」 とつとつ女王ジユディが口を開きました。でも魔王は返事などせず、じりじりとこらみ返すだけです。女王ジユディは話しかける相手を変えることこしたようでした。 「 テフテフ、オルカから靴下留めを受け取れ。母上にお渡しするのだ 」

じうするのと、いう顔でテフテフが見上げるので、ついに魔王は手を動かさざるを得なくなりました。まだ不満そうな表情ではあったけれど魔王はスカートをまくりあげ、手を伸ばしたテフテフがその靴下留めを外そうとするのを見て、キャッシュ博士は思わず目をむきましたが、他の人たちはどういうふうは思わないようでした。靴下留めを外し、テフテフは手の中に握ることができました。

「それを早くよこせ」いかにもじれったそうに先代女王が声を上げました。その彼女に向かってテフテフは一步を踏み出しかけていたのですが、突然何かを感じとった様子です。すぐに立ち止まりました。

「何をしておるのかな」いらだちを隠し、先代女王は猫なで声を出しました。そしてこの声が、テフテフに最後の確信を与えたようでした。

「ねえ先代陛下」テフテフは靴下留めを自分の背中に隠しました。

「どうした?」先代女王は目を丸く大きく見開いています。今にも舌なめずりを始めそうな感じといえばそうかもしません。

「この靴下留めを手渡す前に質問したいことがあるんだけど、いいかな?」

「何を言つておる?」女王ジユディまでが不審そうな顔をし始めましたが、テフテフの考えを察したキャッシュ博士が口配せをして、それ以上言つるのはやめさせました。

「質問だと?」先代女王が答えました。「なんでも答えよつや」

指先でつまみ、テフテフは靴下留めをぐるぐると振り回し始めた。それを追いかける先代女王の田玉は、まるでおあずけを食つているときの犬のようです。テフテフは彼女をわざとじりしていたのでしょうかが、効果は絶大でした。

「質問とは何なのだ？ 早く言え」先代女王はとつとう大きな声を出しました。

「僕の体の匂いをかいで、その感想を述べてよ。何の匂いに似ているかとか。そうしたらこれを渡すよ」子猫をあやすときのよつにじて、テフテフは靴下留めを振つてみせました。

「そんなことか。簡単ではないか。早くこゝへ来い。匂いなどいくらでもかいでやるぞ」

この後は、いつたにどうこうことが起にじたのだと思います？ テフテフやキャッショ博士はある程度予想していたのかもしれません。だからこんな作戦をとつたのでしょうか。自分の体臭が魔物たちにとつてはえもいわれぬものであるといふことはテフテフも承知していました。だからそれを利用したわけです。

テフテフがそばに来て、その体に鼻を近づけるだけで、とたんに先代女王の表情が変化しました。あれほどほしがつていた靴下留めのことなど忘れ、まわりにいる人々のこともとたんに目に入らなくなってしまった様子です。深呼吸をするように大きく息を吸つたのです。

次の瞬間にはテフテフたちは呆然とし、キャッショ博士などは口をぽかんと開けることになりました。先代女王の鼻がどんどん長く、

大きくなつていつたのです、テフテフもあつてに取られ、自分の匂いには相手の鼻を巨大化させる力があるのだろうかと一瞬思つたほどでしたが、もちろんそういうことではありません。鼻の形や大きさだけでなく、気がつくと先代女王の体全体が変化しようとしていました。きっとあれは何かの怪物で、それが魔力でもつて先代女王の姿に化けていたのでしょう。魔力のことはテフテフもよく知りませんでしたが、何かに化けたままでいるというのはかなり大変なことなのかもしません。少しでも気を抜くと、古い自転車のタイヤから空気が逃げていくときのように魔力が薄れ、あつという間に本来の姿に戻つてしまつのでしょうか。

そしてテフテフの体は、魔物の集中力を失わせてしまうほどよい匂いを発しているということなのかもしれません。怪物はついにその姿を現すことになりました。なんとその正体はイノシシだったのです。体中に黒く長い毛が生え、口には牙がある凶暴な野生のブタです。ブタの親戚だから鼻は同じような形をして、前へ向かってずんと突き出しています。鼻の穴も大きく目立ちます。魔力が破れるとき、まず鼻だけが巨大化するように見えたのはそのせいでしょう。

あつと気がついたときには巨大な鼻を押し付けられ、テフテフはイノシシの荒い鼻息をブヒブヒとあびせられていたわけでした。でもそれが並の大きさのイノシシではないのです。大きいなんでものではなく、普通の自動車には乗せることもできないでしそう。トラックを使うとしても小型や中型ではなく、大型トラックを持つてこなくてはならないに違ひありません。

「ガビビビビ」あまりに巨大なので、イノシシの鳴き声はこう聞こえました。びっくりしてテフテフは飛びのこうとしましたが一瞬遅く、靴下留めはあつという間にその手から奪われてしまいました。

そしてなんといふことでしょう。器用にもイノシシは、それを自分の前足にさつとはめてしまったのです。それがどんなに奇妙な光景だったか、説明する必要はないでしょう。乙女が身につける愛らしい靴下留めを、毛むくじらで巨大なイノシシが足につけているのです。でもその光景を笑う人は一人もいませんでした。

「妹よ、どうするのだ」女王ジユディが声を上げました。「博士でもよい。なんとかせい」

「やういわれましても……」キャッシュ博士もうろたえて、そう返事をするのが精一杯の様子です。

「ブビビビビビ」イノシシがひとりわ大きな声を出しました。勝利の雄たけびといふところかもしれません。まるで闘牛場の牛のように、前足で床を強く引っかき始めました。勢いをつけ、こちらへ突っ込んで」よつといふのでしょうか。

「どうするのだ、姉上」

「知るか」

結局みんな一緒になつて、どたどたと大あわてでその場から逃げ出すほかありませんでした。とたんに博士が床に転んでしまったので、テフテフは助けてあげました。もつれ合つようになしながら階段で押し合いへし合いをし、テフテフたちは地上へと登つていきました。幸いだったのは通路が狭く、イノシシは速く走ることができなかつたことです。体の両脇を壁にこすり付けながら、むりやり通り抜けていくことになりました。壁からはがれた石のカケラが、ばらばらとこぼれ落ちます。だからテフテフたちが広間まで逃げ戻つても、イノシシが姿を現すまで1分ほど余裕がありました。

「妹よ、おまえがなんとかせい」

「私は知らん。私の責任ではないぞ」

「怪物どもはおまえの管轄であろう?」

「靴下留めがないと私には何の魔力もないということを忘れたか?」

「ええい。博士かテフテフでもよい。あのイノシシを何とかするのだ」口を大きく開き、女王はどなつています。若いからそういうことはないけれど、もし年を取つたおばあさんであつたら、きっと入れ歯を1メートル以上飛ばしてしまつたであろうと思える勢いです。

「何とかしようとおっしゃいましても」走つた直後なので、博士は肩で息をしています。「とりあえず兵たちを呼ばれてはいかがでしょう」

「おお、そうであった」隣の部屋へ駆け込み、女王は大きな声を出しました。すぐに家来たちが駆け寄つてきたので、一人でも多くの警備兵を集めるように言いつけました。狭い通路を抜け、とうとう地上までやつてきたのか、イノシシの足音が城の中に響いたのはこのときのことでした。

あの足が発するのだからその足音は大きく、まるで大砲の音のように聞こえます。きっとまわりを見回しながら、テフテフたちがいる場所を探してくるのでしょうか。その音がだんだん大きくなつてくるのがわかります。女王や博士などはもう真っ青になつています。

30人ほどの警備兵がやつと集められましたが、どうひこき田に

見ても何かの役に立つとは思えませんでした。みなぶるぶると震え、銃のねらいもまつすぐに定められないほどで、廊下の先にいるイノシシににらまれて、今にも気を失うか、わらわらと逃げ出してしまいます。『かまえ！ ねらえ！』と隊長は大声で指揮していましたが、兵たちはすっかり浮き足立ち、銃を支えるために床に片ひざをつくことさえできません。

それでも射撃は何度か行われました。ダンダンダンと音がし、部屋の中を煙が満たします。発射された弾丸のうちの半分しか命中することはなかつたけれど、それにしたところで硬く強い毛でするりとはじかれ、はね返されてしまうのです。よく見るとイノシシは体の表面に泥と砂を塗りつけ、それを分厚く固めてまるでヨロイのようにしているのでした。これでは銃など歯が立つはずはありません。

『大砲をもつてこい、大砲だ』と女王が叫びましたが、城の中にそんな物があるはずはありません。とりでから運んでくるにしても、きつと何時間もかかつてしまふでしょう。突然イノシシがロケットのよう飛び出して、こちらへ向かつて猛然とダッシュしてきました。浮き足立つていた兵たちは散り散りに逃げようとしましたが、何人かは間に合わず、まるでボーリングのピンのようにはね飛ばされてしまふことになりました。

『姉上』兵たちの悲鳴とつめき声の中に、魔王の声が響きました。広間を横切り、イノシシは反対側のはしまで行つて急ブレーキをかけ、憎々しげにこちらを振り向いたところでした。兵たちはもう役に立たず、女王を守るものは誰もいません。女王に対して鼻をまつすぐに向け、イノシシはねらいを定めようとしていました。次は女王に向けて突っ込み、殺してしまおうといふのであります。

『姉上！』もう一度魔王の声が響きました。

「オルカ、私を助けてくれ」

「助けたいのは山々だが、私も靴下留めがなくてはな」 いつの間にどうやって登ったのか、魔王はテフテフと一緒にシャンデリアの上にいました。城の広間なのだから巨大なシャンデリアで、自動車ほどもある大きく重いものですが、船のイカリに使うような太いクサリでもって天井からつり下げられています。魔王とテフテフはそのままシャンデリアによじ登っているのでした。あそこならイノシシも簡単に攻撃できのに違ありません。

「何でもいいから、このイノシシをどうにかしてくれ」 女王は泣き声を上げました。

「助けてやつたら、姉上はお返しに何をしてくれる?」 魔王の声はいやに冷静でしたが、もちろん女王にはそんなことに気づく余裕はありません。

「何でもする。何でもするから助けてくれ」

「ならばテフテフを姉上の正式の跡継ぎと認め、20歳の誕生日には王位を譲ることを約束するか?」

「何だと?」 いくらこんなときであっても、魔王の言い草の奇妙さに女王も気がついたのでしょう。不審そうに顔をゆがめます。 「何だと?」

ところがなんというタイミングのよさなのか、このときイノシシが大きく息をはき出し、ひづめのある大きなつま先で床を強くこすつたのでした。女王に向かって、今にも突撃をかけそうな感じです。

「わかつた、わかつた。何でもいひじをへく」と女Hも答えるほかありませんでした。

「それは確かだな？」

「ああ、約束する」

「テフテフを姉上の跡継ぎと認め、20歳の誕生日に王位を譲るな？」

「ああ、その通りにする」

「なり結構」魔王はうれしそうに笑いました。「実に素直でよろしい」

シャンテリアから手を離し、魔王が一人でぴょんと床に飛び降りてしまひのを見て、テフテフは目を丸くしないではいられませんでした。魔王は本当に気軽に飛び降りてしまつたのです。そこは、興奮して蒸気機関車のように鼻息を荒くしているイノシシのすぐ目の前にあたります。距離は3メートルもないでしょう。でも怖がる様子もなく、魔王は平気な顔をしているのです。何がどうなつているのだから、誰にもさっぱり理解できませんでした。

もちろんイノシシは魔王をにらみつけていました。今にも突撃をかけてきて魔王がぺちやんこにされてしまうのではないかと、テフテフは心臓が止まつてしまいそうな気持ちになりました。でも魔王はやはりなんでもない顔をしていました。

それがイノシシをさらに怒らせたのかもしれません。鼻と口から大きく息をはき、まるでそのうちに火でも噴き出しそうな感じです。

しかしイノシシは、魔王に向かつて突撃することはありませんでした。ひょいと手を伸ばし、人差し指の先で魔王がイノシシの鼻に触れるのが見えました。すると何が起きたと思います？

テフテフも呆然としてしまいました。イノシシの動きが一瞬で止まり、大きな音を立ててドタンと横倒しになってしまったのです。息をするどころか足の一本、しつぽの先をピクリとさせることさえもうありませんでした。イノシシの心臓が一瞬で止まってしまったのは明らかでした。それだけではなく、とてもおいしそうな匂いが鼻をくすぐり始めたことに気がつき、テフテフが当惑を感じたのも無理はなかろうと思います。

「どうした？ 何が起きたのだ？」女王が声を出すことができるようになつたのは、何秒もたつてからでした。ニヤリと笑いながら、魔王が振り返ります。

「特大のヤキブタができた。うまいぞ、姉上も食わぬか？」

「何がどうなつてゐるの？」テフテフが声をかけると手を伸ばして、シャンデリアから降りるのを魔王が手伝ってくれました。おそるおそる近寄ると確かにイノシシは丸焼けになり、毛もぢりぢりになつて、いかにもおいしそうなヤキブタであることはテフテフにもわかりました。女王やキャッショ博士だけでなく、体中を痛そうにさすりながら兵たちも近寄つてきました。すぐにゴックたちが呼ばれ、大宴会のしたくが始まつたのはいつまでもありません。イノシシは中庭に運び出され、城中の人々が呼ばれ、よく焼けた肉をほおばることになつたのですが、もちろん一番の話題は、魔力が使えないはずの魔王がどうやってこれを倒したのかということでした。

宴会の席ではお酒も振舞われましたが魔王は一口も口にすること

はなく、テフテフを隣に座らせていました。彼女はおしゃべりではなく、自慢話が好きなわけでもありませんでした。でもみんなから問われ、とうとう説明を始めました。

「私はただ、魔力を使つてやつをヤキブタにしてやつただけだ」と魔王は言いました。

「しかしオルカ様は、靴下留めがなくては魔力は使えないのではありますか?」とキャッショ博士が言いました。

魔王はちらりと女王ジユディに視線を走らせました。「まだ小さいので、テフテフは右と左の区別がきちんとついていない。それはいつかのときに姉上も経験すみであろう?だから二セの母上に靴下留めを渡すとき、私がスカートの左側を持ち上げさえすれば、何も迷うことなくテフテフは左側の靴下留めを外した。私の魔力が宿つているのは、左ではなく右側の靴下留めである!」

「計つたな」肉の塊に突き刺そつとしていたフォークを置き、女王は憎々しげににらみつけました。

「しかし陛下」キャッショ博士がとりなそうとします。「そのおかげでイノシシを倒すことができたのです。あの怪物が魔力を得た場合のことをお考えください。どんなに恐ろしいことになつたか。きっと世界は滅び去つてしまつたでしょ?」

「だがおかげで、私は王位を失つ羽田になつた」

「ねえ僕」テフテフが口をはさみました。「20歳になつたら本当に王様にならなくちゃならないの?」

「いやと申すか？ キヤンセルはいつでも歓迎するぞ」女王が顔を輝かせたのはいつまでもありません。

「よくわからないや」テフテフは首を横に振ります。

「キヤンセルなど私が許さぬ」魔王が顔を上げました。 「テフテフを王位につけぬといつのなら、私は姉上の秘密を洗いざらこ国民たちにぶちまけてやるぞ」

「秘密？ 何の秘密だ？」女王が目をむきました。

「忘れたか？ 私は姉上の過去の行動をすべてしるしたファイルに目を通したのだぞ。どんなことでも知つておるわ。たとえば3年前の夏の夜…」

「待て」女王の顔色が信号機のように突然変わるのは、見ていてこつけいなほどでした。 「待て。その話だけは絶対にするな。冗談でも口にするな」

「それはいったい何のお話です？」興味を持ったふうに、家来の一人が口を出しました。

「聞きたいか？」魔王がにやりとします。

「待てオルカ。それだけは絶対にしゃべるな」

女王の表情があまりにも必死なので、とうとう人々は大きな声で笑い始めました。これでテフテフの即位はまず確実でしょう。女王ジユディの時代にもいづれ終わりが来るのだと知つて気が軽くなり、人々ももうジユディのことがあまり怖く感じられなくなつたのでし

よつ。中庭には遠慮のない笑い声が響き始め、城の中だけでなく、明日からはこの国全体がもう少し明るい雰囲気に変わるかもしだせん。

でも大人たちの笑い声を聞きながら、テフテフだけは一人でまたく別のことを考えていました。20歳になつたら僕は本当にこの國の王になるのかなあなんて、まるで夢のような気持ちがしましたが、たぶん実際にそうなるだらうということは自分でもわかつていました。そしてそのとき、きっとオルカから結婚を申し込まれることになるだらうといふこともなんとなく感じられました。花嫁のほうが年上だし、年齢も少し離れているけれど、彼女がそう決心していることは確実だと思えたからです。つまりテフテフは國の王であると同時に、魔王を妻とすることになるわけです。

オルカははじめから、テフテフがこの國の王位を得られるようにはからつていたのでしょつ。先代女王の墓に怪物が住み着いたのは偶然の出来事なのだろうけど、それをとつさにうまく利用したわけです。今はまだ幼い未来の夫に対する、彼女なりの最大のプレゼントということなのでしょう。

なんということだらうとテフテフは思いました。思わずため息が浮かんできます。でもいやな気持ちのため息なのではありません。テーブルにほおづえをつき、いつの間にかテフテフは空想を始めしていました。そしてそれがきらきら輝くヨロイと美しい衣装を身につけ、白馬にまたがり、同じように着飾ったオルカを連れて野を駆ける自分の姿だつたことはいうまでもありません。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2007g/>

魔王のスカートの中

2011年11月11日09時32分発行